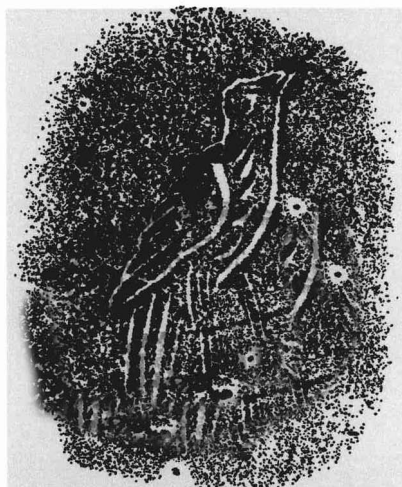


小川国夫作品集 第一卷



河出書房新社

小川国夫作品集

第一卷

昭和五十一年一月二十日 印刷
昭和五十一年一月三十日 発行

著 者 小川国夫

装幀者 司 修

発行者 佐藤皓三

発行所 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の六

電話 (〇三) (二九二) 三七一一

振替 東京一〇八〇二

印刷 暁印刷

製本 大口製本

定価は函・帯を御覧下さい

小川国夫作品集 第一卷

目次

ファンタジア

リラの頃、カサブランカへ 9

ファンタジア 61

テサロニキに病んで 105

愛の種族

傾いた公園 117

二つの顔 126

マグレブ急送 129

十二族の蜂起 139

流域

心臓 151

酷愛 166

先生の下宿 198

消えた青年 202

夜の水泳 215

終の住家へ	220
闇の力	225
姉弟	274
蛇王	279
後記	290

初期習作

初冬	295
二月のノート	302
すみ	308
悲しみ	317
洗い場	324
想う人	331
ある日	337

作品集後記——物の余影

解説

饗庭孝男

主要作品解題

全著作目録

編集部編

山本恵一郎編

383 359

フ
ァ
ン
タ
ジ
ア

リラの頃、
カサブランカへ

ホテルの受付に手紙が一通あった。裏を返すと兄貴からだった。俺は地下鉄の中で読んで行った。パンテオンのわぎに住むココスウのところへ、遊びに行く途だった。

カサブランカ 二月二日 一九五×年

愛する冠^{クラウン}四^ス

おまえが元気なことを知らせてくれた手紙を受けとって、喜びながら、返事もせずに、もう一月経ってしまった。こう二人離れてみると、ずばらが人間の重要な欠点だと、はっきりわかるわけだ。

周も私の所も元気だ。商売は可もなく不可もなし、といったところ。この前生れたことを知らせたセシルは、元気で大きくなった。寒さにめげる様子は少しもない。おまえも暖かくなったら一遍来て、見てやってくれ。

突然で変だが、おまえも商売の恰好がついたら、というより、恰好をつけて、結婚した方がいい。あんまりおそくまで一人でいると、頭が馬鹿になってくるし、それになんといっても女房は安くつくよ。もしパリの商売がうまく行かないようなことがあったら、カサへ来て、私のところを手伝ってくれればいい。兄弟でやろう。実際今少し助けようと思っっているんだ。決してこたわらないようにしてくれ。私も血を分けたおま

えにあんなひどいことをいったのを後悔しているのは、いつも書く通りだ。みんなもおまえの顔を見たがつているよ。

カサブランカはまたそうぞうしくなってきた。こんどは北アフリカ全土に叛乱が計画されているようで、今までにない大規模なものらしい。殺気をはらんで来ると黙ってしまふアラビヤ人、鳥のように騒ぎ出すフランス人、両方の表情が、迫って来る危機のバロメーターのようだ。ここでは近いうちに、フランス人のアラビヤ区への立入りが、禁止になるだろう。こんどは本当にでかいことになりそうだよ。

そんなところへ帰って来い、というんだから、いやになるだろうが、叛乱のニュースもにらみ合わせて、もう少し気候がよくなったら、ひまをこしらえて、ぜひ一度帰って来るように。そのままカサに居ついてしまっても、おまえのそっちの仕事がうまく行くなら、戻って、それを続けてもいい。本当にみんな待っているから……。謝肉祭の時だったかどうか、それとももう少しあと、御復活、リラの真盛りの頃もい、今のうちからつもりをしておかないと、さあといって、すぐ長旅が出来るものではないからね。とにかく、こんどこそこっちの願いをきいてくれ。

全員の心をこめた接吻をおくる。

オギュスタン・李

二伸、周の弟は造船所の足場から、作業中、落ちて、前膊を骨折した。働けるようになるには半年は見なければならぬそうだ。また見舞いを書いてやってくれ。宛名は周のところ。

俺はトゥルヌ・フォル路へ入ろうとする所で、ココスウとやつの恋人に逢った。栗色のロール巻ぎにした髪を、たっぷり肩にたらした娘だった。ココスウと俺と肩をたたき合って氣勢をあげていると、ココスウの肩の向うに隠れるようにして、紹介されるのを待つ風情。ココスウは早く、あの子の可愛い、緊張をとい

てやればいいのに、云いたいことを云っているの、俺はやつの肩越しに目で挨拶してやった。彼女も俺の目を見たが、その目が、なにか堪えられなくて、逃げ出しそうだった。そして、体を、ちょっとどうか、口ではとても云えない風に動かして、彼女の口がムッシューとつぶやいた。この発音は、恐らく彼女自身より、俺の方がはつきり聞いた。ココスウは彼女と俺が、こんな風に彼を出し抜いたのにすぐ気がついていて、「忘れていた、実に忘れていた」

といい気に云いながら、彼女を俺にアンリエット・ラカンと紹介した。彼女が手をのばして来たので、ココスウが俺の名前を云っている最中に、俺たちは握手した。彼女がこんどははつきり、ムッシュー、と云った。俺は彼女のあの手の動きに引き込まれるようだった。と云うのは、俺たち東洋人がフランスの女、ことにパリの女達によく感ずることだが、神経的で、自分がこうなることがどうしようもないような所が、彼女にはあった。俺はすなわち、意外に強く手をにぎられて、ちょっと引張られるみたいになったわけだ。ココスウは、アントワヌ・リーと俺の名前を云って、

「兄弟だよ」

と云うから、アンリエットがちょっと目をみはったのは面白かった。なんて素朴な言語感覚なんだろう。ココスウはセネガルから来ていたんで、虹色に光る黒さだったし、俺の顔も体も全く普通の中国人だと、だれに聞いても云う。

あの時ココスウと話したことには、あいつがジュウドウで、栗色の帯をゆるされたことがあった。それを云う時、ココスウは本当に子供だった。目がかがやいて、息がはずむのがわかるようだ。そして彼の年以下で、栗色の帯以上をとっているのは、パリ中で、八人か九人しかないんだそう。俺もやつがつよいことは知っている。俺はやつがジュウドウをはじめて一年半の頃、日本人の若い二段を、勿論むこうが油断気味だった時だが、おさえ込んだのを思い出す。あのあとココスウと、イタリー広場で飲んだが、名譽にうわずっていた。妙に優しくなってしまうて、黙り勝ちだった。俺は、あの時だった、あじな若造だ、と思った。俺

は、それから、コスウと稽古する機会をいつも探していたし、間もなく、あいつもそれに気づいた。でもあいつには、俺の中にあるようなものはなかった。つよくなりたいたい一心だったし、俺の氣質があいつのとびつたりしていたとは云え、あいつにとっては、ジュウドウの階級が、夢の中にあつたんだ。だから俺はこうして背広でいても、あいつの目には黒帯をしめて見えるんじゃないか。

俺自身、ジュウドウに、少年時代の一時期からあと、それほど打ち込んだことはないし、稽古をつけることには全然興味がなないせいか、入門したものが二月か三月してやめるのは、むしろ当り前なこと、こんな人々の数も随分多いように、漠然と思っていた。コスウがフランス人の友達と二人で入って来た時も、そんな気がしていた。そしてあいつが、ちくしょう、背骨がねじれた、とか日本人の教師は魚くさい、と云いながら、あのオギュスト・ブランキ通りの広い歩道にまぎれ込んだ石ころを、蹴とばしていたのをたまたま見た時なんか、なるようになった、とちょっと感じただけだった。それが、やつと一緒に入ったフランス人の友達はやめてしまったが、やつがジュウドウのことを聞く時は、目をかがやかしながら、態度は素直そのものだった。そんな風になって来たのだ。

「今夜どっかへ遊びに行こうか」

と彼が云った。俺が、

「俺はいいが……」

とこたえると、彼は恋人をふりかえって、

「どう……」

と聞いた。彼女はひかえ目に、

「行くわ」

と云った。俺たちはサーカスへ行くことにして、その夜八時半に、地下鉄のフィーユ・ド・カルヴェール駅で落ちあうことにした。そして二人と別れたが、俺は、二人の去って行くうしろすがたを、ちょっとの間